



人権マガジン

2018年4月

2017年度「人権研修ツアー」報告（その3）

香川人権研究所は人権研修フィールドワーク事業「人権研修ツアー」を毎年実施しています。第12回人権研修ツアー（2017年9月7～8日）は「人権尊重のスキルを学ぶ」をテーマに大阪鶴橋でヘイトスピーチや多文化共生について研修しました。その際のムンさん（多民族共生人権教育センター）の講演要旨を連載します。

新コリアンタウンの賑わい



ブームでなく文化として定着

従来からここで商売をしてきた人たちの中には「さびれてきたので駅周辺に移動しよう」という人もいたが、「残って何とか頑張っていこう」という人たちもいた。

ソウルオリンピックと韓流ブームの中で、商店街の独自色を出す戦略として「生野コリアンタウン」の愛称で宣伝したのが成功した。平日の昼間は人通りもまばらだが、夏休みなどの長期休暇や休日になると、大勢の人でごった返している。世間では韓流ブームは終わったように見えるが、ここでは終わった感じはしない。ブームではなく文化として定着している。毎週末にはここでしか見られないもの、食べられないもの、買えないものを求めて日本各地からたくさんの方が訪れる。

多民族共生人権教育センター

1970年代に民族差別撤廃運動が全国で盛り上がり、「民闘連」（「民族差別と闘う連絡協議会」）ができた。在日コリアンが協力し合って大手企業の就職差別事件に取り組んだのをきっかけに、公営住宅の入居条件から日本国籍をなくす運動、児童手当の国籍条件を撤廃する運動、私立学校の入学試験受験条件にある日本国籍をなくす運動など、国籍によって日本で生まれ育った在日コリアン（韓国籍、朝鮮籍）の人間を排除する民族差別をなくそうとする運動に取り組んだ。



皆さんを対象にセミナー等を開催し、多民族共生の観点から啓発に努めている。

多民族共生人権教育センター（写真）は民闘連運動の流れを引き継いでいる。大阪では2013年4月、ヘイトスピーチ問題が襲った。私がおこへ転職して真っ先に取り組んだのは、行政にヘイトスピーチ対策をとらせる行政闘争だった。その結果、2016年1月に大阪市は全国に先駆けて国の法律よりも先に大阪市ヘイトスピーチ対策条例をつくった。このセンターは市民運動もするが啓発団体でもある。主に企業や学校教育現場の皆

在日コリアンを対象とした介護保険事業

センターは主に在日コリアンを対象とした介護保険事業所である。20世紀の終わりころ、特に在日一世が高齢化して働けなくなった。日本人で仕事をしていたら厚生年金を受けられるが、就職差別が厳しかったので在日コリアンは厚生年金がでるような大規模事業所に就職するのは無理だった。本来なら国民年金法に基づく老齢年金が出るはずだが、国民年金の資格にも国籍条項があって在日コリアンは払いたくても払うことができなかった。結果的に収入が途絶えてしまうことになるので一世、二世の在日高齢者たちは国に対して国民年金にかわるお金を支給することを求めて裁判を起こした。民闘連もサポートしたが最高裁で負けた。そのまま放っておけないので高齢者の生活サポートをこの地域で始めた。自立困難でご飯をつくるのもままならない人たちなどに憩いの場をつくり、昼食を提供した。現在のデイサービスを介護保険法ができる前から取り組んだ。2000年に介護保険法が施行されてからはこの取り組みが事業となった。このエリアには在日コリアンが非常に多く、こういう介護保険事業所への期待が高かった。もちろん、日本人もいるがメインは在日コリアンである。



結果的に収入が途絶えてしまうことになるので一世、二世の在日高齢者たちは国に対して国民年金にかわるお金を支給することを求めて裁判を起こした。民闘連もサポートしたが最高裁で負けた。そのまま放っておけないので高齢者の生活サポートをこの地域で始めた。自立困難でご飯をつくるのもままならない人たちなどに憩いの場をつくり、昼食を提供した。現在のデイサービスを介護保険法ができる前から取り組んだ。2000年に介護保険法が施行されてからはこの取り組みが事業となった。このエリアには在日コリアンが非常に多く、こういう介護保険事業所への期待が高かった。もちろん、日本人もいるがメインは在日コリアンである。

三つの安心

3階から上はグループホームや老人ホームで、70～80名の高齢者が生活しておられ

る。ほぼ9割は朝鮮半島出身者。ここに来る理由は差別問題と関わりがある。在日一世や二世の高齢者が日本の老人ホームに入ると差別にあう。キムチを食べようとすると「なんでそんなものを食べるの、朝鮮人か」と言われる。人生最後の時間なのに不幸な環境だ。預ける家族にとっても、自分の親が最後の時間を肩身の狭い思いをせず、心配することもなく安心して過ごしてほしいと願っている。ここなら韓国、朝鮮の高齢者ばかりで、スタッフも理解があって差別の心配がない。二つ目の理由は食事。年をとると舌が昔に戻り、子どものころに食べたおふくろの味が食べたくなる。ここはほとんどが二世、日本で生まれたが、親が作る朝鮮式のご飯を食べて育った人にとっては、やはり最後に食べたいのはふるさとの味だ。日本の施設では魚の煮つけも醤油とみりんと生姜の味付けだが、彼らは醤油とみりん、ニンニクと唐辛子で味付けした煮つけが食べたい。私は三世、親が離婚したので父方のお婆ちゃんに育てられた。小学校まで家で味噌汁を飲んだことがなかった。学校給食で味噌汁が出たとき、「これは何か」としげしげ眺めたことを覚えている。ここでは和食も洋食もあるが、週に何回かは必ず朝鮮、韓国の味付けのごはんが食べられる。普通の老人ホームでは焼肉は出ないがここでは出る。自分の好きな食事が食べられるのは大きな特徴だ。

三つ目は言葉。二世は生まれながら日本語を話すので言葉の問題はない。日本語で意思疎通できる。戦前に日本へきた一世はネイティブが朝鮮語。だが1980年代以後、日本にいろいろな国の方たちがくるようになり、韓国からもたくさん来るようになった。そのうち当時30~40歳代くらいで来日したニューカマー（新渡人）といわれる人たちが高齢化している。この人たちは普段は日本語だが、認知症になって日本語を忘れると朝鮮語しか話せなくなる。普通の日本の老人ホームでは言葉が通じず、放っておかれる。着替えや食事など最低限の世話はしてくれるが、言葉が通じないので自分の気持ちを伝えられない。だが、ここなら韓国、朝鮮語を理解できるスタッフばかりなのできめ細かなケアが受けられる。本人も家族も安心できる。そういうことがあって在日コリアンをメインにした介護保険事業所が成り立っている。

<焼き肉（ホルモン）の名称>



- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 カルビ（肋骨についている筋肉） | 5 ハラミ（横隔膜の筋肉） |
| 2 ツラミ（顔のほお肉） | 6 タン（舌の付け根） |
| 3 テッチャン（大腸） | 7 コテッチャン（小腸） |
| 4 ハツ（心臓） | 8 ミノ（胃） |

参加者の感想 焼き肉は多文化共生のシンボル



一番刺激を受けたのはコリアンタウンでの話。特に焼き肉の話が印象に残った。朝鮮の方が日本人の食べなかった内臓（ホルモン）を日本の鍋文化をヒントにして日本人の間に浸透させた。大げさに言うと、多文化共生のシンボルと思った。焼肉を食べるときはこのことを思い出しながら食べたい。